

# 5 生 活 科

佐 和 真由美

## 1 生活科でめざす自立とは

生活科の教科目標は、次のとおりである。

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

この目標を受けて、子どもたちの「自立」を考えると、次の3つの側面からとらえることができよう。

- (1) 生活上の自立    (2) 精神上的の自立    (3) 学習上の自立

具体的には

- ① 学級や学校という集団や社会の一員として集団生活ができる。
- ② 自分のことは自分ですることができる。
- ③ 日常生活に必要な習慣や技能を身につけることができる。
- ④ 学習活動や集団生活において自分の考えや意見をはっきりと述べたり、自分の意志を人に伝えたりすることができる。
- ⑤ 人の話をきちんと聞き、自分の考えを深めることができる。  
ということに置き換えて考えることができる。

## 2 本校生活科でめざす自立した子どもの姿

自立という観点から、本校でめざす子ども像をあげてみる。

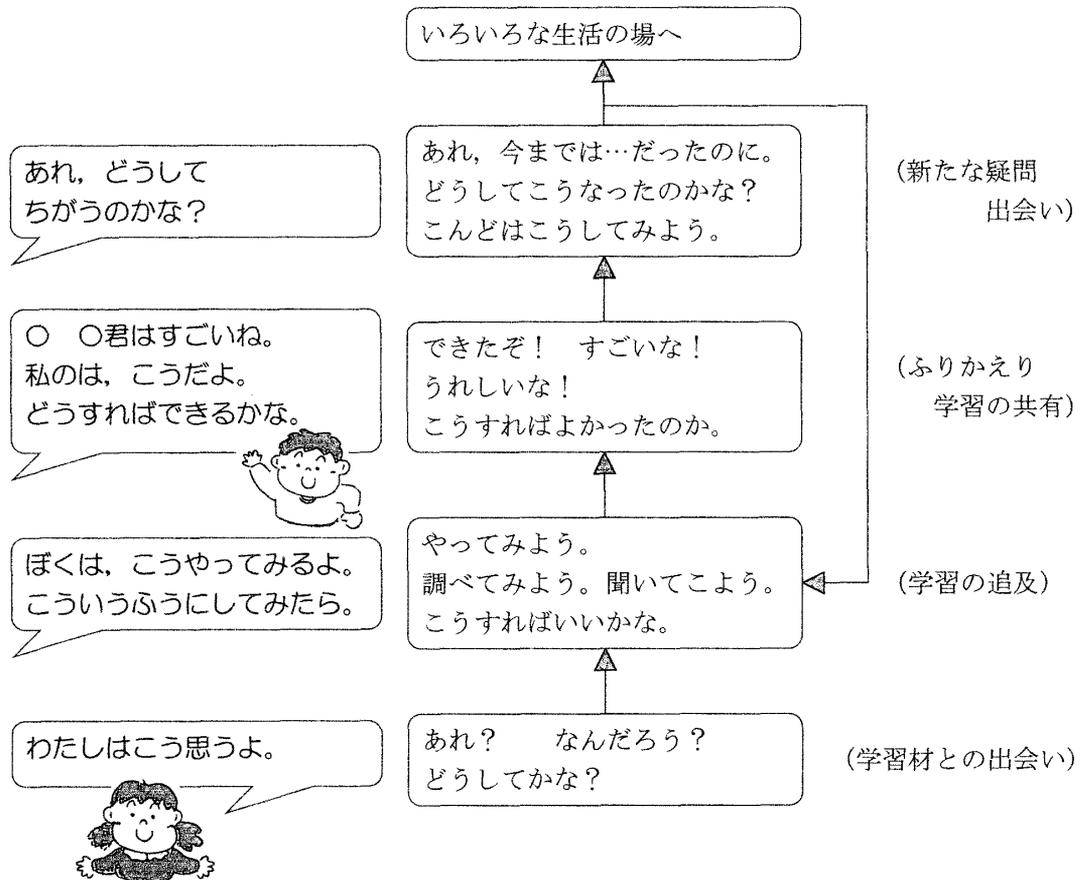
- (1) 具体的な活動や体験を通して知的な問いや実践的な欲求を見つける子ども
- (2) 自分で見つけた問題について、自分なりに解決する方法を考えたり、試したりする子ども
- (3) 自分で気づいたり感じたりしたことを豊かに表現する子ども
- (4) 自分なりの考えをもち、考えに基づいて、判断したり、決定したりすることのできる子ども
- (5) 人やものとかかわり合いながら活動することができる子ども
- (6) 自分や友達のしたこと（していること）をふりかえる子ども
- (7) 生活科で活動したことを基に、自分の生活を自分で豊かにしよう、工夫しようとする子ども

これまでの本校の一連の研究（「個が生きる授業の創造1988～1990」「個が生きる授業の評価1991～1993」「感性を育む1994～1996」）の中で上記(1)(2)(3)(5)における成果がみられた。そして、子どもたちの自立に向けて（1997～）、自己決定を大切に考え、(4)(7)に焦点をあてて研究を進めてきた。今年度は、サブテーマ「人やものとかかわり合うことを大切に」の3年次として、(5)(6)(7)に焦点をあてていく。子どもたちが、「私は、～したい。」という思いをもち、自分なりに試行錯誤を繰り返していく中で、人やものとかかわり合いながら、自分の活動を豊かにしていけるように実践研究を進めていきたい。

### 3 生活科における具体的な活動や体験とは

生活科における具体的な活動や体験は、結果を得るための単なる方法や手段ではない。それは、学習の内容であり、方法であるとともに、目標でもある。単に良い結果だけを求めるのではなく、結果に至る過程を大切にしたい。それは、子どもたちが学習材と出会い、試行錯誤を重ねる過程の中にこそ、子どもたちのさまざまな工夫や気づきが見られるからである。そして、この過程でそれぞれの活動が絡まり合い刺激し合うことで、子どもたちは、自ら考えを発展させたり活動の仕方を選択したりしていくことができ、充実感や有用感を味わうことができる。こうして活動や体験を積み重ね、活動の楽しさを味わうことができれば、自ら活動に取り組み、どのような結果でもそれをバネとして次への活動へ挑戦していこうとするであろう。こうして、子どもたちが、生活科からあらゆる生活の場へ活動を発展させていくことが、子ども自身の生活を豊かにしていくことにつながると考える。

### 4 具体的な授業の中でのかかわりと学習過程



### 5 総合的な学習との関連

総合的な学習は、「人とのかかわり」「もの（自然）とのかかわり」を通して、自ら学び、自分をみがき高めることをねらっており、活動や体験を通して学ぶことや問題解決的な学習の過程を大切にすることなど、生活科の学習を発展させていくものになっている。そこで、その基礎となる生活科では、子どもたちが何よりも活動を楽しみ、活動に没頭したりゆったりと考えたりできるような時間を十分にとり、単元の展開を図りたい。十分な活動や体験を通して、子どもたちは、自ら問題を発見し、自分なりに追究し、判断しながら問題を解決していこうとする学び方を身につけていくのである。

## 6 成果と課題

前述した(5)(6)(7)の3つの観点で、本年度の実践をふりかえってみたい。

### (1) 人やものとかかわり合いながら活動することができる子ども

昨年度の成果として、年間を通じて繰り返し活動ができるような年間計画の見直しと単元の組み立てが、子どもたちがより広くより深く対象とかかわるために有効であることが確かめられた。そこで、今年度も、年間活動計画の中に、春見つけなどの発見活動を位置づけると共に、国語や算数など他教科との関連づけを図った。

子どもたちは、栽培や探検活動などで学習材と出会い、自分なりにめあてを決めて繰り返し対象とかかわるうちに、さまざまな不思議や気づきをもち、そこから新しいめあてをもって進んで活動に取り組むことができていた。特に探検活動では、時には友達と一緒に、グループで、一人でというように、活動の形態を自分で選び、自分なりの見通しをもって活動を行うようになってきた。栽培活動では、自分のアサガオを育てるために、これまでの自分の経験を思い出しながら、家族やいつも育てている近所の人、店の人から積極的に教わり、図書館やインターネットなどからも必要な情報を得るようになった。自分の活動に合わせて、自らかかわる対象を広げていったのである。1年間の思い出で「初めて自分でアサガオを育てたよ。」「(学校探検で)初めて一人でも先生に聞けたよ。」という声が出た。ゆとりをもった活動計画によって、繰り返し対象とかかわり合い活動を行なうことができ、自分ができるようになった満足感や自信を得ることができたと言える。また、単元の中で、各自の活動をお互いが認め合い、アドバイスをし合う場を設けることで、その時々での友達の活動のよさに気づき、活動の仕方なども学び合い、自分の活動に生かすようになっていった。

### (2) 自分や友だちのしたこと(していること)をふりかえる子ども

ふりかえりは、課題をつかみ活動していく中で、活動をふりかえる時に、というように、さまざまな場面で行うことができる。自分のしていることや工夫などをみんなに伝え、よいところを見つけ合う場を設けることで、自分のしてきたことを改めて意識し、友だちの活動と比べて考えたりこれまでの経験と絡み合わせて考えたりすることができるようになってきた。学校探検では、発見ミニカードを常掲地図に貼ったり、教室に見立てた箱に発見カードを入れたりして、各自の探検がみんなに分かるようにしていった。ここでのかわりが、自分や友達の活動を知り、情報を交換し、活動をふりかえる場になっていた。また、活動のまとめりごとに、ふりかえりカードを使い、簡単に自分の活動をふりかえるようにした。この時が、自分の活動への満足感や物足りなさ、友達の活動のよさに気づき、次の活動に向けて自分なりのめあてをもつことができる場になっていた。ひとつの単元の中で、短い時間に自分の活動をふりかえり、次の活動への意欲やめあてをもち、すぐに活動に移ることができるように、さらにふりかえりカードの項目等、工夫をしていく必要がある。加えて、子どもの活動をみとるために、単元を通した学習過程のかかわり表を作成した。毎時間ごとに全員の活動を見とることは難しかったが、単元全体を通しての子どものみとりと、今どの子にどのような支援が必要であるかを知る手立てとなった。

### (3) 生活科で学習したことを基に、自分の生き方を自分で豊かにしよう、工夫しようとする子ども

自分が不思議に思ったことを本で調べたり、学校では解決できなかったことをインターネットで調べてきたり、池の氷を見て実際に氷づくりに挑戦したりする子が増えてきた。これらの活動をみんなに知らせたいという意欲を大切にして、活動をみんなのものにしていけば、各自が自分に合った活動を工夫し、活動することや工夫することを楽しめる子どもになると考えている。